國學院大學学術情報リポジトリ

The career of Matsuda Hukumatsu : a side view of profile of Mitsui Koushi and his comrades

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yokokawa, Shou メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000192

松田福松の足跡
三井甲之とその同志たちの一側面

横川　翔

一、はじめに

明治四十一年創刊の雑誌『アカネ』から出発した三井甲之の文学運動は、その発行元である根岸短歌会での不一致を経て、人生と表現社に引き継がれた。そして、かねてからの親鸞への関心は木村卯之や井上右近との交流を育み、日本主義的なるものへの関心は岩野泡鳴との連携を生んだ。この思索のすえが、大正十四年の原理日本社という思想結社の誕生であった。

三井甲之とその同志たちの運動、特に原理日本社への研究はすでに多くがなされてきた。[1] 原理日本社については、その言論活動が今日的問題と絡み合わせられて語られる場合もあり、かつて言われていたように彼等が歴史から忘れ去られた存在ではなくなったことは確かである。現在は三井甲之が思想史のなかでひとつの体系を構築していた過去が明確化されようとしている段階にあるように見える。

本稿はこの明確化の一助となるために、松田福松という人物を取り上げる。「知識は世界に 情意は祖國に」とは雑誌『原理日本』の創刊号の表紙に掲げられた標語であるが、これは「世界ニ智識ヲ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」の焼き直しであること

は言うまでもない。この文言を原理日本社が掲げ得たのは、ドイツ語の教養のなかで育った三井甲之と蓑田胸喜、フランス文学者の広瀬哲士、[2]そして英語学者の松田福松が同人であったからこそではないだろうか。三井甲之に同調した人物は数多いが、松田福松はそのなかでも実質的に長期間に亘っての信奉者のうちの一人であった。没後にその活動が伝えられることは夜久正雄の随想[3]を除けば皆無に等しかったが、福間良明の発表[4]はそれまでの三井甲之や蓑田胸喜を通して見た原理日本社とはまた違った結社の一面が明らかになる端緒となった。しかし、松田福松の実像は殆んど知られていない。もちろん前者の文章は松田福松の人柄を伝えており、これはお互いに近しい関係であったことからも重要と言えるが、その執筆の目的は必ずしも人物像を明らかにすることに重点を置かれたものではなかった。後者は、デモクラシーを唱道する国家で用いられる言語の専門家であった松田福松が日本主義を掲げる原理日本社で主要な位置を占めていたという特質に着目し、英語学と日本主義との結び合わさりへの分析が組み立てられたものであった。ただそれは、三井甲之とその同志たちの人脈で形成された「同信の友」のなかでの松田福松の位置については未だ不透明の向きが否めない。

筆者はこれまでの調査で、原理日本社のなかで三井甲之と蓑田胸喜に続く第三の人物であるこの松田福松の生涯の実相を通史的に提起することが可能と考える。原理日本社の前身である人生と表現社が活動していた大正期にすでに「同信の友」の円環に繋がり、原理日本社の結成と消失とを経て、解散状態にあったシキシマノミチ会を戦後に再興するという具合に、松田福松は際立って長期的にこの運動に携わってきた。思想運動が社会に影響を及ぼすにあたっては、思想する中心的個人の才覚がまず第一に要求され、それを取り囲む同調者の現実的な働きかけを必要とする。そして、如何なる人物がその思想家を賛助したのかを検討することでなされる人的諸相の解読は、思想結社の営為を照射する。ゆえに、ここで示す従来は不明とされていた松田福松の伝記的諸側面は、三井甲之とその同志たちの運動をこれまで以上に推し量ることに役立つだろう。

二、少年時代から青年時代へ

松田福松は明治二十九年十月二十九日に佐渡で栄一と与喜のあいだに四人兄弟の末っ子として生まれた。もとは相模から出た松田家は旧幕臣であったが、栄一は入婿、与喜は養子であっ

た。栄一は工部大学校を卒業した鉱山技師で、当時は佐渡相川の金山の工場長を務めていた。御雇外国人による英語を用いた技術教育が盛んであった工部大学校での経験を活かして、中学校の英語教師にも取り組んだ時期があったという。岐阜中学校に勤めていたときに栄一は、同じく在職していた英語学者の斎藤秀三郎と交流があったようだ。のちに松田福松が英語学の終生の師と仰ぐ斎藤秀三郎との具体的な関係を保つのは彼が早稲田大学を中退したあとに正則英語学校に入学してからのことである。[5]

仕事の都合で各地を転々としていた栄一であったが、単身赴任していた鹿児島で脳溢血のために亡くなってしまった。福松がまだ小学生のときで、一家はこのために持ち家のあった東京に落ち着いた。与喜は女一人で一家を支えることになったが、親戚の礫川喜望の世話もあり、家禄を失った旧士族に与えられた公債を元手に何軒かの貸家を経営することで経済的基盤を固めることが出来ていた。[6]

小学校を出た松田福松は私立東京開成中学校に入った。その四年生のときのクラス担任が、のちに京都学派の哲学者として知られる田邊元で、英語科の担当でもあったという。[7] 原理日本社は多数の知識人を糾弾したことで知られているが、田邊元も批判の対象であった。しかし、この頃の松田福松は田邊元のことを慕っており、下宿先までたびたび教えを乞いに赴くほどで、その交流は田邊元が開成中学校を離れて東北帝国大学や京都帝国大学に移ったあとも主に文通の形で続いたらしい。原理日本社が田邊元に対して行った一連の批判のうちのひとつである松田福松の論文の冒頭に、「田邊博士の御評言を得たことは、再び舊恩師の膝元に侍る思して、感激に堪へない所であつた」[8]と記されているのはこのような経緯が背景にある。

また、夜久正雄によると、同じ四年生のときに松田福松は脚気になった。この治療のために白米食から玄米食に換えたが、後年に食養に凝るようになった素地はこの頃に形成されたのだろうか。[9] 三井甲之をめぐる人脈のなかでは、手のひら療治を代表とするいわゆる代替医療の存在は大部分で受容されていた。[10]

大正三年に開成中学校を卒業すると、第一高等学校の受験に失敗したこともあり、松田福松は早稲田大学予科に入った。しかし、本科に在籍していた大正六年に起こったいわゆる早稲田騒動が原因で退学を決意するに至った。これについては本人が後年に書き著したものを長くはあるがそのまま掲げる。

予科での成績が良く、幸い特待生と成り学費免除となって

母を喜ばせて本科の一年を終え、夏休みが済んで九月の新学期に登校して見たら、歴史に残る早稲田大学の学生大ストライキの真最中で、気に食わぬ教授は学生が殴りつけて追返すという騒ぎのところへ行き当ってしまって居た。そのため、予科の西洋哲学史を担当せられた波多野精一教授も学園を去って、京都大学へ行ってしまわれることとなり、筆者は学園への魅力を失い、自分一己で学問の道を拓かねばならぬと思い、取り敢えず折角母が大学まで進学させてくれた気持ちに報うるためにもと考え、当時毎年一回行われて居た文部省の中等教員検定試験（中略）を受けることとし、昼間は上野公園内の帝国図書館に篭って、内村鑑三の英文著書「ジャパン・アンド・ジャパニーズ」や「ハウ・アイ・ビケーム・ア・クリスチャン」、岡倉覚三の英文著書「ブック・オブ・ティー」や「アウェイクニング・オブ・ジャパン」等を読み、また雑誌「日本及日本人」の和歌欄とその選者三井甲之代の選評及び時事評論を熟読し、夜は神田錦町の正則英語学校の文学科に通い、斎藤秀三郎先生や学習院教授飯塚陽平先生等の講筵に侍したのであった。[11]

退学を決めた松田福松は斎藤秀三郎が創設した正則英語学校に入ることになる。その翌年には、文部省の英語科の中等教員検定試験に合格した。正則中学校、東京電機高等工業学校、明新中学校、麻布学園、日本経済短期大学、城西大学と続く松田福松の教師生活はこうして始まった。[12]英語を生業とすることを決意した動機や時期などは不明であるが、これまで述べたように、その家庭環境は英語とは非常に昵懇であった。斎藤秀三郎とは父の栄一との縁もあり、また、開成中学校の在籍中にすでに正則英語学校の講習会に参加していたことからすると、早い時期から英語への接近はあったのだろう。[13]しかし、それはまだのちのちに見受けられるような日本主義と英語学の接触にまでは至っておらず、このころは英語と哲学に魅かれるという当時としては普通の青年であったように見える。

三、原理日本社とシキシマノミチ会のあいだ

三井甲之をめぐる人脈に松田福松が関係するようになるのは、早稲田大学を中退する前後のことであった。のちの原理日本社に直結するまさに胎動の段階である。[14]当時の三井甲之は実家のあった甲州松島村に退いており、松田福松にとっての直接の機縁は東京に住んでいた木村卯之たちとの交流にあると見ら

れる。[15] なお、蓑田胸喜も、木村卯之と親しかった井上右近[16]の紹介で、三井甲之に出会っている。松島村で初めての面会を果たしたときの様子を松田福松は次のように回想している。

三井兄に初めて面晤を得たのは大正七、八年の頃であったらうか、（中略）、夏の一日、甲府市郊外松島村（現在の敷島町）へ志したのであった。早朝にも拘らず三井兄は竜王駅までわざわざ未見の少年を出迎へて下さった。途中、持ち物をさへ代って腕に下げて持運んで下さった。お家に着いて終日話が尽きず、その夜は一晩泊めて頂いて帰って来たのであるが、「国際的世間虚仮、唯日本是真」の標語が「ドイチラント・ユーバー・アレス（ドイツ国超一切）」の思い上りに通じはしまいかといふ幼稚な疑問の提起もこの時忘れたやうに氷解されて居た。[17]

松田福松は教務のかたわらに文筆家としての地歩を「同信の友」たちのあいだで確立していった。批判集言社という出版元から「同信の友」たちのためのパンフレットも発行していた。[18] 蓑田胸喜が主宰した雑誌『原理日本』では松田福松は大正十四年十一月の創刊号からの主要同人であり、編輯業務の代理を務めることがあった。

松田福松の足跡を追ううえでは、原理日本社の附属団体の位置にあった昭和三年設立のシキシマノミチ会のことが重要であろう。[19] 戦後に松田福松が、年来の同志で画家の田代二見[20]などと共に再興を目指したのは組織としては後者であったからである。シキシマノミチ会も原理日本社と同様に機関誌を発行していたが、その内容には注意が払われていた。昭和十年発行の雑誌『シキシマノミチ』に掲載された三井甲之の執筆による文章を掲げる。

本誌は出版法による定期刊行物で、新聞紙法による『原理日本』とは違ひまして時事評論を掲載することは出来ません。又直接時事問題をよんだ歌も掲載することは出来ませんが、その代り『原理日本』の如く対時局の政治的主張が、職業的身分地位等に敏感的に作用する心配は全くありません。[21]

このように、出版法と新聞紙法との兼ね合いがあったとはいえ、雑誌『原理日本』との明確な線引きが図られていることは興味深い。原理日本社が担当するところは、政治思想問題を対象とした雑誌経営や講演活動等が専らであった。これと対照的

にシキシマノミチ会が原理日本社のそれよりもむしろ日常の実生活に差し迫ることを目的とした精神修養に重点を置いていたことは、短歌実修と並んでいわゆる代替医療が前面に押し出されていた事実からも分かる。シキシマノミチ会が宣揚した代替医療には「たなすゑのみち」という手のひら療治[22]が知られている。この手のひら療治というのは、ただ単に手当てをすることではない。それに先立つ修養が求められており、明治天皇御製拝誦の「國民宗教儀礼」を感得し、体操や食養を実践することは、同信感交の世界への没入のための入り口であった。松田福松は「をしもののみち」という食養に取り組んでいた。増上寺で行われた手のひら療治の実修会では食養の講話を行なったという。[23]

機関誌上の報告に基づくと、シキシマノミチ会の公称会員数は百五十名程度である。一般の会員や原理日本社の同人以外にも、機関誌には、蓑田胸喜が指導する慶應義塾大学の精神科学研究会や黒上正一郎を慕う第一高等学校の昭信会に連なる学生たちの短歌の投稿も確認出来る。このように、従来の同志の連帯を深めるために定例会は役立ったが、新しい同志の合流という観点から見るとそれはささやかであったと考えられる。シキシマノミチ会が発行していた機関誌は遅刊や休刊を繰り返しており、雑誌経営は不安定だった。[24]

一高昭信会を出発点とする若手たちの運動、すなわち田所廣泰、高木尚一、加納祐五、桑原暁一、南波恕一、小田村寅二郎、夜久正雄などを中心とする日本学生協会[25]にはシキシマノミチ会の修養との類似点が見受けられる。[26]これは短歌実修で顕著であった。原理日本社は大衆教化活動についてはシキシマノミチ会の事業の部分的成功が挙げられる程度で振るわなかったが、反面にその思想の流れを汲む日本学生協会は積極的な同志獲得を志向しており、一定の成果を見せていた。同志の組織化についても原理日本社は興味を示さなかったが、一高昭信会の系統の若手たちは現実の政治に働きかけるための団体育成に熱心であり、先達を補う役割を果たしていた。しかし、この新しい世代の運動は時局批判が原因で、昭和十八年二月の東京憲兵隊による出動が発端となって壊滅に追い込まれるに至る。

蓑田胸喜が健康を損ない始めてからは、齋藤隆而が主に編輯に参加していた雑誌『原理日本』であるが、昭和十九年一月の刊行を最後に停刊し、雑誌経営を基幹としていた原理日本社は解散したも同然の状態に陥った。これの素因としては、佐藤卓己が指摘するように「実質的な編輯者がいなくなった」[27]ことや慢性的な用紙配給の不十分が考えられるが、具体的には不明で

ある。

蓑田胸喜は昭和十九年六月についに郷里の熊本県八代郡に退くことになり、[28]松田福松も同じ頃に朝鮮北部の黄海道にある明新中学校に赴任するために家族と共に渡海してしまう。[29]また、田代二見は長野県木祖村の知人のもとに身を寄せ、[30]三井甲之は山梨県敷島村の自宅で過ごす日々だった。

四、戦時下から占領下へ

対米英戦が進展するなかで、英語が敵性語であるという理由で教育の現場から軽視される動きは東京電機高等工業学校でも起こっていた。同校の英語教員であった松田福松はかねてから現状に疑念を有しており、「外國語の技術的反譯に終始すべきではなくしてその外國語に依つて現はさるゝ思想そのものゝ批判者であらねばなりませぬ」、[31]「我らは『ゆめ〳〵奴隷とはならじ』と歌ひしイギリス魂を尊敬し、その獨立不羈の『自由の精神』を我ら自からの國民生活に實現せしめむとする者である」[32]という主張にも見えるように、「皇室に對し奉るわれらが最高の忠誠心」[33]を前提とする英米精神への理解が英語学習のあるべきところと考えていた。[34]しかし、時局の変転は松田福松にも認識の見直しを促していった。

昭和十七年十一月発行の雑誌『原理日本』にその主張が掲載されている。表題は「ドイツ語を我國に於ける第一外國語たらしむべきことの提言」である。このなかで、松田福松は現下の情勢では英語は第一外国語としての地位に不適格であると断言する。英語はたしかに日本が明治維新以降に外国の文物を摂取するうえでの基本的な役割を担ってきたが、そのように「我國に於ける第一外國語たるべき充分の資格を備へてゐた」のは、当時としては「英語こそ日本語と対立して、東西洋文化の対抗補足的代表語」であったからに過ぎないのである。そして、明治の採長補短の時代を経た昭和十七年の現在では英米の文明は日本に融化されているために、英語は学校教育においての積極的意義を失ったと確認している。とはいえ、松田福松は英語教育の廃絶にまでは踏み込まない。むしろこれを愚論と一蹴していることに注意したい。東洋文明の現実的把持者としての日本が世界文明を統一主導するためには、なおも西洋文明を構成する一言語である英語の威力を必要とすると言明している。同誌同号に「イギリス古道と現米英」を併せて掲載した理由はここにあるだろう。しかし、いずれにしてもこの理解と喚起とは、戦争が進展するなかでドイツが欧州の有力な文化を築いている

国家であるという認識が爛熟した結果であった。相次ぐ戦勝報道のもとで社会的にも英語の地位が低下したことも強く影響していた。なお、ドイツ語が第一外国語となることで縮小が予見される英語教育界については、たいていの英語教員はドイツ語の教養があるので心配は無用という見方を松田福松は示している。

阿部隆一[35]はそのような松田福松に賛同し、雑誌『原理日本』の昭和十八年四月号に「英語を第一外国語とすべからず」を発表している。日本の勝利を確信する阿部隆一は戦後世界を予想し、オランダ並みの四等国に成り下がる英米の言語の不必要を表明するに至った。盟邦のドイツへの期待の表れでもある。

学校教育においても英語を敵性語と見做す風潮に傾くにあたり、松田福松は昭和十九年四月に東京電機高等工業学校を離職した。辞めるに至った明確な経緯は不明である。同年六月に家族を伴って朝鮮北部へと渡ったことは前述した通りだ。赴任先の明新中学校では国語の担当であった。東京の自宅を引き払ってまでのわざわざの移住の動機は奈辺にあったのだろうか。英語学者としての情動を窺える内容が、渡海直前に夜久正雄に宛てた書簡に示されている。

小生も米英語及その文学に迷ひ来し五十年の夢を今次聖戦の下に碎破せられ人生五十年を経て始めて茲に新生を求めて我上代文化開花の媒体たりし朝鮮半島への転進の決意を固めしめられました。

米英語をむなしく口に囀りてあだにすぐし来し月日くやしきあやまてる四十九年のわがいのち今こそきよく身滌ぎはらはむ[36]

この時点では松田福松は日本の勝利を信じていたように見える。しかし、書面にもあるように、原理日本社の思想戦としては敗北を認識していた。このように、行き詰った主要同人の殆んどは東京を離れるに至ったが、これは物心両面で協力関係にあった日本学生協会の若手たちが前年に検挙されたことと無関係ではないだろう。

滞在一年余りで敗戦を迎えた松田福松であったが、その後もしばらくは朝鮮半島に留まった。行動を起こしたのは十月に入ってからである。物資が乏しいなかで迫りくる冬季に不安を感じるようになり、まずはソ連軍占領下の朝鮮北部を脱出することにした。家族と知り合いの男性と共に徒歩で約三日間を費

やし、ようやく米軍占領下の朝鮮南部に入ったが、それでも本土にすぐに帰還というわけにはいかなかった。多くの引揚者がいるなかで船待ちをしなければならなかったのである。短いあいだではあったが英語力を活かして米軍相手の通訳として糊口を凌いだという。[37]

十二月に博多への入港を果たしたのち、松田福松は連れていた家族を紀州にある夫人の実家に預けると、職探しのために東京に入った。警視庁渉外課への就職が出来たが、ここでも英語に関する業務に従事したという。次に挙げる三井甲之宛の昭和二十一年九月二十三日消印の書簡には引揚後の松田福松の生活が垣間見える。

引揚後一度御目にかゝり親しく御話も承り度存居りながら、切符も自由には買へぬ交通難と、窮屈なる役所の生活、及び夜學の勤務に、三食雑炊の食糧難も加って、遂に御訪問申上げる機を得ずに居りましたが、今日上野の帝国図書館にて偶然桑原君（筆者注：桑原暁一か）に逢ひお話中、立川の交通公社まで行けば午前十時頃までは自由にその日の切符が甲府までならば入手出来るとの事でしたので、急に思ひ立ち、今度の日曜日（九月二十九日）に右切符が果して入手出来ましたならば一寸お邪魔をさせて頂き度存居ります[38]

このようにようやく生活を再建し始めると、甲州に隠遁している三井甲之に再会する意欲を見せ、新時代への対処を図るようになった。「日本を敗る者は、支那にあらず、ソ聯にあらず、英米、ユダヤのいづれにもあらず、日本を敗る者はたゞ我ら日本人そのものに外ならぬ」[39]と昭和十四年にすでに危機感を表明していた松田福松にとっては、この敗戦の意味は明白であった。そうしたなかで、蓑田胸喜は自身の方途を自決に求めた。これに対し松田福松は、「有るがまゝのアメリカ人」を指して、「真に砕かれたる心をもってかの人たちに親しみ、新日本の再興のために一切の教訓を吸収しようではないか！」[40]と生き延びることを選んだ。

五、戦後

結社としての原理日本社は昭和二十三年一月二十八日附の総理庁告示第八号の指定のために解散団体となった。[41]これは昭和二十一年二月二十二日附の勅令第百一号第四条の規定に基づくもので、ほかの多くのいわゆる超国家主義的団体も同じような

経緯で結社禁止の処分を受けている。昭和十九年における雑誌『原理日本』の停刊を期にほぼ活動停止状態にあったにせよ、大正十四年の機関誌創刊から実に二十年以上にも亘る活動を繰り広げてきた原理日本社という結社はこうして完全な帰結を迎えたのだった。そして昭和二十三年三月十九日附の総理庁令第十九号で解散団体の主要構成員と見做された人物はいわゆる公職追放の覚書該当者に挙げられた。[42]

原理日本社の同人も覚書該当者に挙げられたがその事由は一様ではない。三井甲之は山梨県内の翼賛支部長であったことに加えて著書が問題とされた。蓑田胸喜、松田福松、瀧口堯の三名は原理日本社の要職者として、齋藤隆而は國際反共連盟が発行していた機関誌の編輯者として、それぞれ名前が見える。しかしこの頃には蓑田胸喜、瀧口堯、齋藤隆而はすでに亡くなっており、三井甲之は脳溢血の後遺症で半身不随の状態にあった。警視庁渉外課で英語関係の業務に従事していた松田福松は公職追放のために失職したという。[43] 物故者までもパージの対象とする占領下の機械的な行政は、反面にその徹底性が際立つ処置でもあった。松田福松は木口公十、三井甲之は笹野谷人といった具合に筆名を用いて当局の監視を気にするようになった。

シキシマノミチ会はと言うと、その拠点の殆んどは敗戦の前後に次第に活動停止状態に陥っていったようだ。ただ少なくとも大阪においては小規模ながらも根強い活動が続けられていた。木村松治郎や吉川悦司などを中心とする「同信の友」の人々が昭和二十年代前半から活動していることが確認出来る。彼等は『人生随順』という雑誌を不定期で発行していたが、昭和三十年における第四号の刊行にあたり、これをシキシマノミチ会の大阪支部の機関誌とする位置付けが正式になされた。[44]

東京におけるシキシマノミチ会の再発足は昭和三十一年四月三日に行なわれた。この日は三井甲之の命日にあたる。この第一回の会合には、梶村昇、福島一郎、松田福松、宮崎五郎、茂木一郎、夜久正雄、井上孚麿、岡村愛一、岡村誠之、小田村寅二郎の十名が集まったとされる。賛同者としては別に、木村松治郎、高木尚一、田代二見、宮田武義、吉川悦司の名前が見える。[45]

松田福松がその第二回の会合の報告で「新発足の御通知を（中略）旧知の方々に差し上げましたがお返事を頂いた数は極めて少く今の世と本会の関係を深く反省思念せしめられました」と書き記しているように、再発足以降は時代風潮との隔離とも相俟って活動は拡張を志向することは出来なかった。その

ため、会合や雑誌を中心とした同志間の連絡保持、そして三井甲之の顕彰に努力が注がれた。[46] 活動の見通しの暗澹は、田代二見が松田福松に宛てた手紙にも表れている。

一人の力強い方が出ればズン〳〵進捗すると存じますが今の世のことなか〳〵むずかしいことでもありますがも少し三井氏のものもひろく紹介すれば出て来ることもあるかと存じます一人の蓑田氏出ればずつと活動し始めると存じます。（中略）シキシマノミチ会としては帰命日本の信の伝導をと存じますが如何でせうか、「宗教的にゆけばよかつた」と泣いてくやまれた蓑田氏の供養にもなると存じます。[47]

戦前の活動が三井甲之や蓑田胸喜といった指導性を発揮する人物に依拠したものであったことを物語る手紙でもある。戦後のシキシマノミチ会はかつての仲間たちとの思い出を繋ぎ留めることで精一杯であった。日本学生協会の若手たちは新たに国民文化研究会を組織し、時勢に対応することで一定の成功を収めていた。だが、シキシマノミチ会は目立った新しい同志の合流も見込めず、この「同信の友」の集まりはますます高齢化を辿るばかりであった。田代二見もシキシマノミチ会の新しい雑誌『大空』[48]を刊行する計画の道半ばで病没した。大阪で地道に刊行されていた雑誌『人生随順』は、その編輯に従事していた木村松治郎が亡くなったことで廃刊の已む無きに至った。[49] シキシマノミチ会は有名無実と化し、正式な解散がいつであるのかさえも分からないままに同人たちは次々と亡くなっていった。

戦後も松田福松の本業は学校教員であった。学生に対しては思想的なことに触れることは少なかったという。シキシマノミチ会の事業としては各種書籍の刊行や三井甲之の歌碑建設などが行なわれたが、城西大学に「斎藤文庫」と「敷島文庫」が設けられていたことも併せて紹介しておく必要があるだろう。松田福松が城西大学で八十歳を過ぎるまで教鞭を執ることになったのは、その創立に関わった新藤富五郎が正則中学校時代の同僚であった旧縁によるものである。「斎藤文庫」は斎藤秀三郎の旧蔵書を整理したもので、松田福松が戦後直後に吾妻書房から出版した「斎藤文法シリーズ」はこれらを底本にしているという。[50]「敷島文庫」は三井甲之の旧蔵書であり、この目録[51]は現在は山梨県立文学館に所蔵されている。着の身着のままで逃げるように朝鮮北部からの引き揚げを果たした松田福松の手元には、旧師の書籍や書簡は殆んど残っていなかった。

山水楼で松田福松の喜寿祝賀会が催されたのは、昭和四十八年十一月二十四日のことであった。慶應義塾大学の教授に就任していた阿部隆一の世話によるもので、古くからの同志が集まった。[52] 共通の思想的政治的目的というよりもむしろ思い出が彼等を結び合わせていた。城西大学を退いてからは浜名湖畔で文字通りの余生を過ごす日々であったが、そのようななかでも国民文化研究会の進展には関心を寄せていたようだ。[53]

平成十年三月十二日、数え年で百二歳で生涯を閉じた。家族、医師、知人に看取られての最期であった。

六、おわりに

本稿は原理日本社の主要同人であった松田福松の行動的側面をひとつの人物史という形式で構成した。これまでの三井甲之や蓑田胸喜の視点から見た彼等の運動とはまた異なる視座の提供を目的としている。同様の目標を有すると考えられる福間良明の論文を踏まえた本稿は、その実証的な裏付けを含めた再検討を行ない、加えて三井甲之とその同志たちについての先行研究への補填を意識している。例えば、塩出環の「三井甲之と原理日本社の大衆組織「しきしまのみち会」の場合」は専ら雑誌『原理日本』に現われた関連記事を基盤に構成されたものであったが、本稿と脚注とでは新たにシキシマノミチ会が発行していた機関誌等を下敷きにその修正を図った。さらには戦後に再結集したシキシマノミチ会が、推進力となる思想家を失ったことで社会的発信力を大幅に減らし、ささやかな連帯を守ることに注力するほか無かった実態を明らかにした。しかしながら以上は松田福松が関係する箇所を中心に概観したに過ぎず、この連帯の全体的な内実を推し量るには紙面の不足があることを付言しておかなければならない。

松田福松は必ずしも歴史の表舞台に目立つ足跡を残した人物ではない。だが、植村和秀が三井甲之とその同志たちの活動を「同信の友たちのゼクテ的な共働作業と見るべき」[54]と指摘したことを想起すると無視し難い存在となる。冒頭で述べたように、思想運動は支持者という存在があることで初めて実体を得る。際立って長期的な三井甲之の信奉者であった松田福松の足跡を辿る行為は、彼等の営為を考える後世の人間にとっては避けては通り難い。組織を構成する分子の結合から見た原理日本社あるいは同信の友の連帯への検討は、この集団が行なった思想運動の内実を改めて浮き彫りにする。先行研究を含めても片鱗のみを取り扱われるに留まっている同人が存在していること

を考えると、三井甲之とその同志たちの運動についての研究は未だ途上にあると確認されて然るべきだ。もとより、本稿も全体の修成のための部分に過ぎないことは言うまでもない。今後の継続的な検討を期する。

注

1　柏書房から平成十六年に発行された『蓑田胸喜全集』にも携わった竹内洋、佐藤卓己、植村和秀、井上義和、福間良明の業績をまず挙げたい。先駆的な取り組みには、米田利昭の一連の発表（「抒情的ナショナリズムの成立 —三井甲之（一）—」『文学』昭和三十五年十一月号、「抒情的ナショナリズムの自壊と復活 —三井甲之（二）—」『同』昭和三十六年二月号、「抒情的ナショナリズムの復活 —三井甲之（完）—」『同』昭和三十六年三月号）、保坂耕人「三井甲之と雑誌「アカネ」の周辺」（『中部文学』昭和四十一年一月号）、阿南三章「蓑田胸喜小伝」（『暗河』昭和四十九年七月号）、昭和女子大学近代文学研究室「三井甲之」（『近代文学研究叢書』第七十三巻、昭和女子大学近代文化研究所、平成九年十月）、斉藤真伸が雑誌『みぎわ』に平成十六年から平成二十三年に亘って連載した「三井甲之試論」などのものがある。片山素秀「原理日本社論のために —三井甲之を中心とする覚え書き—」（『近代日本研究』平成五年三月号）、塩出環『原理日本社の研究』（神戸大学博士論文、平成十六年三月）、打越孝明「黒上正一郎と三井甲之」（『大倉山論集』平成十九年三月号）、昆野伸幸「三井甲之の戦後」（『近代日本の国体論』ぺりかん社、平成十九年十二月）などの成果も研究史に重要な位置を占めている。親鸞との関わりに注目している論考には、石井公成「親鸞を讃仰した超国家主義者たち（一）—原理日本社の三井甲之の思想—」（『駒澤短期大学佛教論集』平成十四年十月号）、同「親鸞を讃仰した超国家主義者たち（二）—木村卯之の道元・親鸞比較論—」（『駒澤短期大学研究紀要』平成十八年三月号）、木下宏一「近代日本と親鸞思想 —三井甲之の場合—」（『政治経済史学』平成二十四年三月号）、同「三井甲之の初期思想形成に関する考察（Ⅱ）—親鸞思想の日本主義的受容—」（『近代文学論集』第四十一号）などがある。ここでは主要な先行論文を記載するに留めるが、三井甲之とその同志たちについての研究は活発な状況が続くだろう。

2　広瀬哲士は明治十六年九月九日の生まれで、第一高等学校では三井甲之と同窓だった（「年譜」『三井甲之歌集』「三井甲之」歌碑建設・歌集刊行會、昭和三十三年二月）。雑誌『アカネ』では広瀬青波という筆名で参加した。その後も「同信の友」として行動を共にするが、蓑田胸喜の行動が精力さを増すなかで次第に距離を置くようになったらしい。「蓑田さんの努力は非常なものでしたが、三井さんが嘗て、広瀬君（哲士氏）などは、蓑田君や僕などのやり方はあくどく感じられて、嫌ひなのですよ、と云はれましたが」という文章が細貝正直の「消息（上）」（『人生随順』、第十二号、昭和三十六年十二月）に見える。昭和二十七年七月二十六日に没した。

3　広瀬哲士は Henri Bergson や Paul Bourget をはじめとするフランスの哲学者や文学者の紹介で知られている。その著作のうちの『行動思想家モオラス』（東京堂、昭和十五年十二月）は Achille Segard の『Charles Maurras et les idees royalistes』の訳出で、共和政の真っ只中のフランスで王制の樹立を目指した Charles Maurras を日本に紹介したという一面もあった。

夜久正雄「松田福松先生追悼」『国民同胞』平成十年四月号。大正四年六月二十一日生まれの夜久正雄は、第一高等学校在学中に昭信会という学内団体に加入し、原理日本社と接点を持つに至る。戦後は国民文

化研究会に参画。亜細亜大学名誉教授。平成二十年三月十九日に没した。

4 福間良明「英語学の日本主義—松田福松の戦前と戦後—」『聖戦」の残像 知とメディアの歴史社会学』人文書院、平成二十七年六月。

5 松田福松「手記」『遺歌遺文拾遺』ながらみ書房、平成十一年三月十二日。同書は松田福松の遺作をご遺族がまとめたものである。八葉の写真、大正十一年から平成八年に詠まれた短歌の一部に加え、戦後に著された十七本の文章などを掲載。

6 松田福松「手記」『遺歌遺文拾遺』ながらみ書房、平成十一年三月。

7 『東京開成中学校校史資料』（東京開成中学校、昭和十一年十一月）で田邊元の任用期間を確認出来る。

8 松田福松「偏知的思想法の禍殃を分析す—田邊博士の再論を讀みて—」『日本精神と科学精神』原理日本社、昭和十二年五月。

9 「松田先生は開成中学四年生の時、脚気にかかった。その治療のため、白米から麦飯に変へ、さらに「無砂搗半つき米」に移り、その縁で食養会とつながりが出来た」（夜久正雄「松田福松先生追悼」『国民同胞』平成十年四月号）。

10 三井甲之と手のひら療治については片山杜秀が「写生・随順・拝誦 三井甲之の思想圏」（竹内洋・佐藤卓己編『日本主義的教養の時代』柏書房、平成十八年二月）で考察しており、これに対する塚田穂高の「霊術と国家観 —三井甲之の手のひら療治—」（『宗教研究』第八十八巻別冊、日本宗教学会、平成二十七年三月）という発表がある。

11 松田福松「斎藤秀三郎先生の憶い出」『遺歌遺文拾遺』ながらみ書房、平成十一年三月。

12 同書に収録の「手記」には「日頃私の崇拝して居た波多野精一博士」という表現があり、波多野精一の退職への衝撃が窺える。正則英語学校へは斎藤秀三郎に誘われて、東京電機高等工業学校へは片桐鎌三郎の推薦で、麻布学園へは大津正の推挽で、それぞれ就職した。いずれの人物も正則英語学校の関係者である（松田福松「手記」『遺歌遺文拾遺』ながらみ書房、平成十一年三月十二日）。明新中学校への就職の経緯は不明である。日本経済短期大学へは恐らくは夜久正雄が関係していたのではないかと考えられる。

13 日本経済短期大学は興亜専門学校の系譜を引いている学校である。興亜専門学校の経営の中心的役割を果たしていた人物に愛国社の岩田愛之助があった。夜久正雄が興亜専門学校で教鞭を執るに至ったのは岩田愛之助の世話があったおかげである（「私のプロフィル」『夜久正雄先生をお偲びして』国民文化研究会、平成二十年十一月）。「我が国には、時勢の変化の中で折々英語熱が世に高まる時があったが、そういう時の熱に浮かされて、少年時代の筆者も正則英語学校の夏期講習会に参加したものと思われる」（松田福松「斎藤秀三郎先生の憶い出」『遺歌遺文拾遺』ながらみ書房、平成十一年三月）。

14 原理日本社の成立過程は、塩出環『原理日本社の研究』（神戸大学博士論文、平成十六年三月）を参照。

15 松田福松『斷金抄』しきしまのみち会静岡支部、昭和六十一年六月一日。木村卯之については、石井公成の「親鸞を讃仰した超国家主義者たち（二）—木村卯之の道元・親鸞比較論—」（『駒澤短期大学研究紀要』平成十八年三月号）を参照。

16 井上右近は明治二十四年九月十九日の生まれ。眞宗大学を卒業すると東大文科に遊学し、神道史研究に打ち込んだ。その後は眞宗大学で教鞭を執るが、ほどなくして伏見にある実家の寺院を継ぎ、門徒教化に専念するようになったという。井上右近が長きに亘って主宰した大正十二年七月創刊の『青人草』は、「同信の友」の連帯を窺ううえで重要である。昭和三十五年十月二十二日に没した（『青人草』第二百六十二号、昭和三十六年二月一日）。なお、松田福松が蓑田胸喜に出会ったの

は大正十年頃であるという（松田福松「亡友を憶ふ」『新公論』興風会「新公論」部、昭和三十年二月号）。

17 松田福松「おもひで」『原理日本の信と学術』シキシマノミチ会大阪支部、昭和五十五年三月。

18 筆者が確認した『批判集言』は次に掲げるものである。出版元の小石川区大和町二十三番地は当時の松田福松の住所と同一である。松田福松編『批判集言』批判集言社、大正十四年二月。

19 シキシマノミチ会についてはすでに塩出環が「三井甲之と原理日本社の大衆組織「しきしまのみち会」の場合」（『古家實三日記研究』神戸大学、平成十七年五月号）で基礎的研究を発表している。

20 田代二見は明治二十三年二月十三日に福岡県浮羽郡で生まれ、昭和三十五年十一月十五日に没する。兄の順一は早い時期に三井甲之と関係を築いていた。二見が実際に三井甲之をめぐる人脈に関わるようになったのは大正三年であるという（「田代二見略歴」『人生随順』昭和三十六年八月号）。画家としての業績が顧みられることは殆んど無かったが、最近になって足立元が「反シュルレアリスムの美学『原理日本』に見る前衛芸術弾圧の思想的背景」（『前衛の遺伝子 アナキズムから戦後美術へ』ブリュッケ、平成二十四年一月）で田代二見を紹介している。

21 三井甲之「消息」『シキシマノミチ』第一巻第一号、昭和十年十月。

22 『手のひら療治』（アルス、昭和五年）の「手のひら療治實修来歴」に三井甲之の文章で「江口俊博先生の御指導により「たなすゑのみち」の手のひら療治を實修し、櫻澤如一氏の御来訪により「をしもののみち」の食養法にたづさはる機会を得」たとある。

23 「しきしまのみち會理事食養會常任理事松田福松氏「食養法」につき講話し」という記述が三井甲之の「手のひら療治實修會」（『日本及日本人』昭和四年八月十五日号）に見える。加えて同誌同号にある平田晋作の「たなすゑのみち實修會拾遺」によると、この講演中に松田福松は「白米の害」を説いたという。

24 一高昭信会の学生を指導していた黒上正一郎は自身が師事する三井甲之に宛てた書簡で「をしもののみち」の実修に励んでいることを伝えており、「同信の友」のあいだでの食養への一定の賛同を見て取れる（「黒上正一郎書簡」昭和四年十一月三日、山梨県立文学館所蔵、資料コード：230095904）。黒上正一郎については、打越孝明の「黒上正一郎と三井甲之」（『大倉山論集』大倉精神文化研究所、平成十九年三月号）を参照せられたい。

脚注19に掲げた論文で塩出環が未発見としていたシキシマノミチ会の機関誌である『やまとごゝろ』や『シキシマノミチ会会報』の現存を筆者は確認した。それをもとに、機関誌の名称の変遷についてを先行研究と多少重なるところがあるが概観しておきたい。

シキシマノミチ会は昭和三年に田代順一の発願で結成された。その機関誌の名称は最初は『シキシマノミチ会会報』であったが第五号から『やまとごゝろ』となった。しかし、昭和五年に田代順一は病床に臥し、松田福松がこれに代わって会報の編輯や事務連絡を担当したが、田代順一はまもなく亡くなった。会報も第八号を前後に途絶し、シキシマノミチ会の業務は原理日本社に統合される形となる。昭和十年に至り、三井甲之の編輯のもとで、田代二見が奔走し、雑誌『シキシマノミチ』がシキシマノミチ会の機関誌として発行されるも、第三号で絶えた。その後は三橋一夫が創刊した雑誌『とがま』へ機関誌の地位が三井甲之の指示で移されたが、これも遅刊や休刊を繰り返していた。雑誌経営ではシキシマノミチ会は失敗していたが、ここまで刊行に拘ったのは原理日本社のような時事評論的活動が「教養的方面の活動と相俟つて始めて所期の目的を達し得る」（「しきしまのみち會機関誌復活に當りて」『とがま』昭和十二年一月号）という信念のためであっ

た。

25 日本学生協会とその解散については次の三著に詳しい。小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』日本教文社、昭和五十三年六月。国民文化研究会編『田所廣泰先輩 遺文追録』平成十四年三月。井上義和『日本主義と東京大学』柏書房、平成二十年七月。

26 『文化の戦士』は日本学生協会が全国の学生に呼び掛けて催した全日本学生菅平合同合宿訓練の模様を記録した短編映画であるが、そのなかで合宿中の和歌創作鑑賞の時間が「しきしまのみち會」として紹介されている（「附録ＤＶＤ 記録映画『文化の戦士』」『日本主義的学生思想運動資料集成Ⅱ 書籍・パンフレット篇』柏書房、平成二十年十一月）。日本学生協会でも「シキシマノミチ」には単なる詩歌の表現に留まらない意味が込められており、それは彼等が思想批判を行なうにあたっての修練であった。この点については、『日本主義的学生思想運動資料集成Ⅰ 雑誌編』（柏書房、平成十九年）と『日本主義的学生思想運動資料集成Ⅱ 書籍・パンフレット篇』柏書房、平成二十年）とを併せて参照せられたい。

27 佐藤卓己「解題」『蓑田胸喜全集 第七巻』柏書房、平成十六年十一月。

28 竜北村教育委員会『竜北村史』、昭和四十八年六月二十六日。佐藤卓己「解題」『蓑田胸喜全集 第七巻』柏書房、平成十六年十一月十日。

29 松田福松は昭和四年二月に寒川キミと入籍した。二男四女を儲ける。朝鮮行では、二女が夫人の実家に残った。以上はご遺族への取材に基づく。

30 『木祖村誌 源流の村の歴史（上）［古代・中世・近世偏］』（木祖村誌編纂委員会、平成十三年三月十六日）に田代二見についての記述がある。

31 松田福松「外國語教育の思想的方面について」『青人草』第三十一号、大正十五年二月。

32 松田福松「國體明徴永久思想戦の現實的政治的意義」『原理日本』昭和十二年六月号。

33 注31に同じ。

34 一高昭信会から発展した東大文化科学研究会が発行する雑誌『學生生活』の昭和十四年十二月号に、大学入試での英語を代表とする外国語試験全廃の可否を問う質問調査の結果が掲載されてある。三井甲之は英語全廃に賛成し、蓑田胸喜は試験官の思想学説をまず正す必要を説き、松田福松は現状の英語教育に欠落は存在しているとするも試験自体の撤廃は否と答えた。原理日本社の同人でこのように態度が各々で異なっているのは珍しい。

35 阿部隆一については脚注52を参照せられたい。

36 『「松田福松 遺歌遺文拾遺」追補』個人蔵。

37 朝鮮半島での行動、ならびに引き揚げとその直後についてはご遺族への取材に基づく。

38 「松田福松書簡」（昭和二十一年九月二十三日、山梨県立文学館所蔵、資料コード23009791８）。

39 松田福松「事變の危機迫る！」『原理日本』昭和十四年八月号。

40 木口公十・夜久正雄編『ホイットマン詩撰』吾妻書房、昭和二十四年五月。昭和五十二年にご遺族の手によって復刻されており、また一部が『米英思想研究抄』として国民文化研究会から昭和五十八年に発行された。

41 「昭和二十一年勅令第百一號（昭和二十年勅令第五百四十二號「ポツダム」宣言の受諾に伴ひ發する命令に關する件に基く政黨、協會其の他の團體の結成の禁止等に關する件）第四條の規定によつて次の團体を指定する。

昭和二十三年一月二十八日

内閣総理大臣　片山 哲

神武會　聖戦貫徹同盟　原理日本社　天照義團」（『官報』昭和二十三

年一月二十八日）。

42 『官報』昭和二十三年三月十九日。

43 総理庁官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』日比谷政経会、昭和二十四年。松田福松の失職についてはご遺族からの聞き取りに基づく。

44 『人生随順』の創刊号は昭和二十二年九月二十日に唯信會という組織から出版された。

45 『松田福松 遺歌遺文拾遺』追補』個人蔵。梶村昇は、この会合のことは殆んど印象に残っていないと筆者に語った。

46 シキシマノミチ会の事業でいくつかの著作集は発行されたが、三井甲之の全集は完成しなかった。昭和四十年から昭和四十五年にかけて、手のひら療治の事業を継承した宮崎五郎が『三井甲之選集』を十三巻まで編んでいる。市役所勤務や電機店経営をしていた吉川悦司は独力で全集作成を企図したが、中途で亡くなった（福岡哲司『遠い散歩 近い旅 山梨文学散歩』山梨ふるさと文庫、平成十五年六月）。なお、三井甲之に先立たれた三井みほ子が夜久正雄に宛てた手紙には次のようなくだりがある。「宮崎五郎様がお出になり丁度松田さんもお見えになりました。全集を出したらとのお話でしたが（松田さんは何も仰せになりませんでした）、私は故人も望んでをらず只今の時代ではどうかと存じあまり賛成いたしませんでした」（『復刊アカネ』アカネの会、第十七号、昭和六十年十一月）。

47 「田代二見書簡」（昭和三十三年六月六日、個人蔵）。

48 田代二見が亡くなったのは、東京と大阪で分立していたシキシマノミチ会の大同団結と「大阪に本拠を置く「大空」誌の刊行計画」とを議決した折のことであった（松田福松「あゝ田代二見大兄」『人生随順』第十一号、昭和三十六年八月十日）。しかし、その後に雑誌『大空』が刊行されたという記事は見当たらないので計画は頓挫したものと考えられる。

49 木村松治郎を追悼する『人生随順』の最終号である百十九号は昭和五十九年九月二十日に発行された。編輯は吉川悦司が担った。

50 松田福松「「斎藤文庫」について」『斎藤秀三郎先生生誕百年記念文集』SEGクラブ事務所、昭和四十年十月。

51 目録（「敷島文庫目録」山梨県立文学館所蔵、資料コード：230094371）は「昭和四十年八月二十二日作成」とある。そのなかには「九州シキシマノミチ会同人「出発式記、歌稿、論文、報告、通信等」（昭和二十年 原稿綴込百十四枚）」という記載が見えるが、これについては松田福松が「いま国民文化研究会の名において毎年九州各地に合宿教室の開かれて居る原動力の一つをその言霊の威力に感得せしめられる」（松田福松「敷島文庫について」『人生随順』第三十一号、昭和四十年八月）と解説しており、興味深い。

52 阿部隆一は、自決した蓑田胸喜を偲ぶ会合も企画した。その遺子をはじめ、井上孚麿、宮田武義、後藤積、阿部隆一、松田福松が中華料理店の山水楼に集まった（松田福松「正見と邪見」『人生随順』第十八号、昭和三十八年三月）。宮田武義が経営するこの山水楼を原理日本社はたびたび会合の場として用いていた（『山水樓五十年小誌』株式会社山水楼、昭和四十八年四月十八日）。

大正六年二月二十六日生まれの阿部隆一は、福島県の安積中学校在学中に大節会という学内団体を組織し、一高昭信会と気脈を通じていた。昭和七年のときに三井甲之に送った年賀状が残っている（阿部隆一書簡」昭和七年一月一日、山梨県立文学館所蔵、資料コード：230095172）。慶應義塾予科に進み、蓑田胸喜に私淑したという（「大倉精神文化研から研究生として入所 豫・文一Aの阿部君」『三田新聞』昭和十一年九月二十八日号）。戦後は慶應義塾に奉職し、書誌学の分野で活躍した。昭和五十八年一月二十二日に死去。

53 「名越二荒之助書簡」（昭和五十一年十月八日、個人蔵）に、「先日は慰霊祭に御出席頂き、我々の会の万才の音頭をとって下さいまして先生らしいお人柄に接することができましたことを心から深謝いたします」とある。この「慰霊祭」とは国民文化研究会のそれだろう。

54 植村和秀『「日本」への問いをめぐる闘争』柏書房、平成十九年十二月二十五日。

［附記］本稿を作成するにあたっては多方面に絶大なご協力を頂いた。御礼を申し上げる。松田昌一氏、松田雅子氏、柳原操氏。ながらみ書房。山梨県立文学館の諸氏、特に中野和子氏。国民文化研究会の諸氏、特に國武忠彦氏、奥冨修一氏。最後に、梶村昇先生。ほかにも多くの方々の示唆に発奮されるところがあったことを記しておきたい。